

中期フランス語における *moult* の衰退と *très*, *beaucoup* の発達 —統語的側面から見た *moult*, *très*, *beaucoup* の機能的対立—

菊池 美里

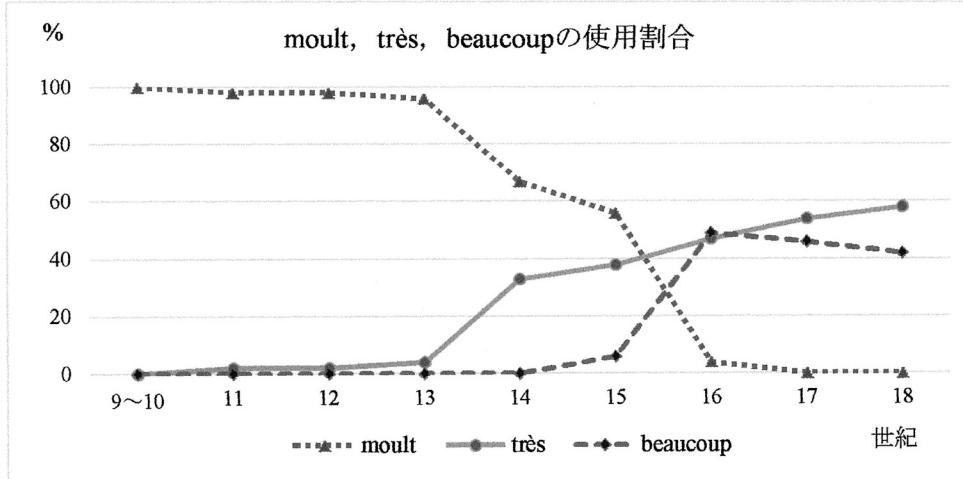
はじめに

フランス語の歴史を遡ると、古・中期フランス語においては、*moult* という語が常用語として広く使用されていた。*moult* は、名詞を修飾する数量詞¹として働く一方で、形容詞と副詞を修飾する強意詞²としての機能も兼ね備えていた。この *moult* は、新しく誕生した程度副詞である *très* や *beaucoup* の発達とともに衰退の一途をたどり、現代フランス語には古語として残るのみである。本稿では、Marchello-Nizia (2006) による先行研究に基づき、*moult* がフランス語の常用語から姿を消し、*très* と *beaucoup* が *moult* の機能を受け継ぐ新しい語として発達した現象について論じる。

1. 先行研究 Marchello-Nizia (2006)

フランス語から *moult* が衰退し、*très* と *beaucoup* へと交代した現象について、初めて網羅的に調査を行ったのが Marchello-Nizia である。この研究は、9世紀の古仏語から現代フランス語に至るまでのフランス語の文献³を対象として行われたもので、*moult*, *très*, *beaucoup* の用例数の通時的变化をもとに、それらが共存・競合する時期を明らかにしたものである。Marchello-Nizia は、これら 3 形態素間の用例数の割合の変化をグラフを用いて示している。図 1⁴は、3 形態素 *moult*, *très*, *beaucoup* の用例数の合計を 100%に換算した上、その各々の用例数が 3 形態素全体の用例数のうちのどれだけの割合を占めているのかということを年代毎に示したものである。Marchello-Nizia によれば、*moult* の用例数の変化について、「①9世紀から 13世紀に至るまで、ほぼ独占的に使用されていた」、「②14世紀に入ると急速に減少し始め、*très* と *beaucoup* の使用が増加した」、「③16世紀にはほぼ消滅し、その機能は *très* と *beaucoup* へ完全に取って代わった」という。そして、これら 3 形態素の変化によって文法体系が再構築された結果、名詞や動詞などの主要な文法的カテゴリーを修飾対象とする「強意・数量詞」*intensifieur-quantifieur* として *beaucoup* が選択され⁵、形容詞や副詞など、補助的な文法的カテゴリーを修飾対象とする「強意詞」*intensifieur* として *très* が使用される⁶という区別が生じたと結論づけている。現代フランス語に存在する *très* と *beaucoup* の機能的対立関係は、この第 3 段階で生まれたものだというわけである。

図 1



2. 問題提起

Marchello-Niziaによれば、*moult*が衰退し、*moult*の機能を*très*と*beaucoup*が完全に吸収する前の時期には、*moult*と*très*、および*moult*と*beaucoup*の間に一定の使い分けが存在したという。

まず、*moult*と*très*では修飾対象の語に違いがあった。多くの場合、*très*が修飾対象としたのは、*bon*（よい、立派な）、*fier*（獰猛な）、*dur*（厳しい、激しい）、*grant*（大きい、偉大な）などの単音節の付加形容詞や、*bien*（申し分なく、大いに）や*fort*（強く）などの単音節の副詞であった。その一方、*moult*が修飾する副詞には多音節語が多く、語尾に-*ment*を持つ副詞や、過去分詞を修飾する傾向が強かった。また、出現する位置にも違いがあった。*très*は前接辞的性格が強く、修飾する要素の直前に置かれることが一般的であった。これに対し、*moult*は離れた位置の要素を修飾することもできた（例：*Mout est granz*）。

一方、*moult*と*beaucoup*の間にも、使用方法の違いが存在した。*moult*はもともと修飾対象の要素と隣接して使用されていたが、のちに修飾対象の要素から切り離され、文頭に置かれることが多くなった。同じテキスト内で*moult*と*beaucoup*が競合するようになってからも*moult*の出現する位置は比較的流動的であり、14世紀に入ってフランス語の語順が変化した後もこの傾向は続いた。これに対し、新しく発達した*beaucoup*は動詞の後に置かれる傾向が強かった。*moult*と*beaucoup*とは相補的に使用されていたということである。

本稿では、Marchello-Niziaが指摘した以上の事実に着目する。*moult*と*très*の間で問題となる形容詞・副詞修飾機能の競合と、*moult*と*beaucoup*の間で問題となる動詞修飾機能の競合を中心に取り上げ、これらの語の機能的対立について、主にその統語的側面から分析する。

3. 調査と考察

本研究は、*très* と *beaucoup* が使用され始めた頃、両者がどのような機能において *moult* と使い分けられていたのかを明らかにすることを目的とする。よって、BFM と DMF に収録されたデータのうち、*très* が *moult* と競合はじめた 12 世紀と、*beaucoup* が *moult* と競合はじめた 15 世紀に成立したテキストを対象として調査を行った。

3.1. *moult* と *très* の競合一形容詞・副詞修飾機能—

まず、*moult* と *très* で競合していた形容詞修飾機能について分析する。

表 2 *moult* の形容詞修飾用法：**Hue de Rotelande** (1180)

<i>moult</i> が修飾する形容詞（用例数）	統語的特徴
grant 大きい (11), alosé 賞賛された (2), cher 重要な (2), estrivé 立ち向かった (2), sage 賢明な (2), bon よい (1), pensif 物思いにふけった (1), preux 勇ましい (1), dur 厳しい (1), errant 放浪する (1), ferme 断固とした (1), fier 尊大な (1), honoré 尊敬されている (1), léger 軽い (1), pesant 重い (1), plénier 完全な (1), puissant 力のある (1), valant 價値がある (1)	<i>moult ADJ</i>
grant 大きい (2), beau 美しい (1), blanc 白い (1), bon よい (1), courtois 礼儀正しい (1), fondé 学識の深い (1), franc 率直な (1), pensif 物思いにふけった (1), plein de ~でいっぱいの (1), sage 賢明な (1)	<i>moult être ADJ</i>

表 3 *très* の形容詞修飾用法：**Hue de Rotelande** (1180)

<i>très</i> が修飾する形容詞（用例数）	統語的特徴
bloï 金髪の (1), félon 残虐な (1), fort 強い (1), grant 大きい (1), haut 高さがある (1), morne 気落ちした (1), tendu 広げられた (1)	<i>très ADJ</i>

表 2 および表 3 は、*très* が発達し始めたとされる 12 世紀に成立した作品 **Hue de Rotelande** (1180) の Ipomédon に見られる用例の一覧である。この作品中の *moult* と *très* の用例を調査したところ、形容詞

修飾を果たす例については、*moult* が 43 件、*très* が 7 件見られた。表 2 と表 3 を見ると、*moult* と *très* は全ての用例において、修飾対象の形容詞より前の位置に置かれていたことが分かる。両者の大きな違いは、*très* が全ての例において修飾対象の語の直前に置かれ、「*très+形容詞*」(例 5 : *tres felon tyrant / very cruel tyrant*) という形を取っていた一方で、*moult* は述語動詞 *être* を挟んで形容詞を修飾する場合があったということである(例 6)。前接辞的性格の強い *très* と、分離語法を取ることのできた *moult* との違いがこの結果に表れているといえよう。

例 6) *moult* + 形容詞 (句)

mult est plein de curteisie ;
 much be-3SG full of courtesy
 it is full of courtesies

ROTELANDE, H. D. (1180), *Ipomédon*

続いて、副詞修飾機能を果たす *moult* と *très* の使い分けについて考察する。ここでは、*très* が発達し始めたとされる 12 世紀に成立した 3 作品を例として取り上げる(表 4)。

表 4 *moult* と *très* の副詞修飾用法

年代	作者・作品名	副詞修飾用法			
		<i>moult</i>		<i>très</i>	
		用例数		用例数	
1175	Pierre de Saint-Cloud, <i>Roman de Renart, Branche 7</i>	7	bien 大いに (1), entièrement 完全に (1), fièrement 大胆に (1), hautement 大声で (1), simplement 率直に (1), tôt 早く (1), volontiers 喜んで (1)	3	bien 大いに (3)
1180	Hue de Rotelande, <i>Ipomédon</i>	25	bien 大いに (10), tôt 早く (4), volontiers 喜んで (3), durement 激しく (2), engresusement 激しく (1), grièvement ひどく (1), largement 大きく (1), moins より少なく (1), richement ゼいたくに (1), souvent しばしば (1)	6	bien 大いに (6)
1199	Robert de Boron, <i>Le Roman de l'Estoire dou Graal</i>	25	bien 大いに (11), très 非常に (7), longuement 長い間 (2), bonnement 實に (1), durement 激しく (1), nettement 清潔に (1), tendrement 優しく (1), volontiers 心から (1)	11	bien 大いに (9), humblement つっしんで (1), tendrement 優しく (1)

表 4 を見ると、*très* が修飾していた主な副詞は *bien* であり、この *bien* は *moult* と *très* が共通して修飾する語であったことが分かる。また、*moult* は多音節語や語尾に-*ment* を持つ副詞を中心に修飾してい

たことも確認できる。以上の特徴は、Marchello-Nizia が指摘する、*très* が副詞を修飾し始めた時期の *très* の用法と合致する。一方、統語的特徴を見ると、*moult* と *très* はいずれも修飾する副詞の直前に置かれ、それぞれ「*moult+副詞*」（例 7：*mult volentiers / very gladly*）、「*très+副詞*」（例 8：*tres bien / very well*）という形式で使用されていたことが明らかとなった。よって、*moult* と *très* の副詞修飾機能における競合には、統語的因素よりも、被修飾語の音節数が強く関与していた可能性が高い。*très* は、音節数の少ない *bien* のような語から結びつきはじめ、次第にその勢力を拡大していったものと考えられる。

3.2. *moult* と *beaucoup* の競合—動詞修飾機能—

moult と *beaucoup* が動詞修飾機能において競合し始めるのは 15 世紀になってからであるが、これらの競合について取り上げる前に、まず動詞修飾用法の *moult* が出現する文構造について述べる。*moult* の機能を受け継ぐ *beaucoup* は、*moult* の統語構造を模倣しながら新しい副詞としてフランス語に組み込まれたと言われているからである。Marchello-Nizia は、11～16 世紀のテキストに見られる *moult* と動詞の位置関係に着目しながら、*moult* の動詞修飾用法の発達過程を分析している。その説明によれば、強意詞 *moult* はもともと修飾対象の要素の直前に置かれていたが、次第に修飾対象の要素から離れ、文頭（もしくは文の前方）で使用されるようになったという。このような新しい統語構造は、主題が文頭に置かれ、動詞が 2 番目に配置される動詞第 2 位語順の言語（以下、「V2 言語」と呼ぶ）に特徴的なものと見られる。そして V2 言語である古仏語でも、主題が文頭に置かれるようになり、強意詞も話題化に関わる要素として文の前方に配置されるようになったのである。Marchello-Nizia の調査結果によれば、12 世紀までは「*moult+動詞*」型が主流であったが、13 世紀以降になると「*動詞+moult*」型が優勢になったという。

それでは、この *moult* の機能を受け継ぐ *beaucoup* と動詞との統語的関係はどうなっていたのであろうか。両者の使い分けを明らかにするため、*moult* と *beaucoup* が動詞修飾機能において競合し始めたと言われる 15 世紀のテキストを対象に、*moult* の用例 221 件と、*beaucoup* の用例 47 件の統語的特徴について分析した（表 5 および表 6）。

表 5 15世紀における **moult** の用例の統語的特徴

大分類	小分類	全用例数	用例数の内訳	統語的特徴
moult V 型 (127)		26		moult V
		16 (複合過去)		Aux ⁷ moult V
	関係代名詞 dont の直後	1		dont moult V
	関係代名詞 auquel の直後	1		auquel moult V
	関係代名詞 qui の直後	49	47	qui moult V
			2 (複合過去)	qui moult Aux V
	関係代名詞 que の直後	5	4	que moult V
			1 (複合過去)	que moult Aux V
	接続詞 et の直後	29	27	et moult V
			1 (複合過去)	et moult Aux V
			1 (複合過去)	et Aux moult V
V moult 型 (94)		78		V moult
	接続詞 car の直後	1		car V moult
	接続詞 et の直後	10		et V moult
	関係代名詞 lequel の直後	1		lequel V moult
	関係代名詞 qui の直後	4		qui V moult

表 5 は、 **moult** と **moult** が修飾する動詞との位置関係を一覧にしたものである。「moult+動詞」型が 127 件（例 9 および例 10）、「動詞+moult」型が 94 件見られる（例 11）。

例 9) **moult+動詞型**（主節内での使用）

Firebras moult s' efforça et vint prés de luy et dist :
 Firebras much try hard-PST and go-PST close to him and say-PST
 Firebras forced himself to walk up to him and said

BAGNYON, J. (1465), *L'Histoire de Charlemagne*

例 10) **moult**+動詞型 (従属節内の使用)

Cestui Combadech fut ung homme qui moult aimoit justice et verité,
this Combadech be-PST a-ART man who much love-PST justice and truth
Combadech was a man who loved jutice and truth very much

PHARES, S. D. (1494), *Recueil des plus celebres astrologue*

例 11) 動詞+**moult**型

Et Dieu les amast moult,
and god them-3PL love-PST much
And God loved them very much

BÉTHENCOURT, J. D. (1490), *Le Canarien*

例 9 や例 10 のような「moult+動詞」型の構文においては、それが主節であっても従属節であっても、moult が冒頭もしくは前方に配置される例が多かった。このことから、強意詞として moult が使用される場合には、古仏語すなわち V2 言語特有の語順が取られ、「強意詞を文頭（もしくは文の前方）に置く」という原則が適用されたため、「moult+動詞」型の構文が取られていたものと考えられる。一方、例 11 のように「動詞+moult」型の構文も見られた。これは、古仏語が属する V2 言語から現代フランス語が属する非 V2 言語へと移行してゆく過程で現れた形式と見ることができ、「moult+動詞」型よりも新しく登場した構文だと考えられる。

一方、beaucoup と beaucoup が修飾する動詞との位置関係を一覧にしたもののが表 6 である。「動詞+beaucoup」型構文（例 12）が 26 件、「beaucoup+動詞」型構文（例 13）が 21 件見られる。いずれの文型を取る場合にも強意詞 beaucoup は、修飾対象の動詞と隣接する位置に現れており、beaucoup が文頭（もしくは文の前方）ではなく動詞の後ろ（もしくは文の後方）に置かれる例も一定数確認された。このことは Marchello-Nizia も指摘しており、beaucoup が新しい「動詞+beaucoup」文型と並行して古い「beaucoup+動詞」文型でも使用され続けたことは、moult の語法が beaucoup の語法にも借用された結果ではないかとの見解を示している。これが事実ならば、beaucoup が使用される場合、moult の語法に倣って「beaucoup+動詞」型構文が選択される場合と、beaucoup という新しい語を古仏語由来の語順で用いることを避け、新しい形式の「動詞+beaucoup」型構文が採用される場合とが同時に存在していたものと推測される。

表 6 15世紀における **beaucoup** の用例の統語的特徴

大分類	小分類		用例数の内訳	統語的特徴
V beaucoup 型 (26)			15	V beaucoup
	動詞の直後に副詞 句 de beaucoup		1	V de beaucoup
		(複合過去)	2	Aux V beaucoup
	関係代名詞 qui の 直後		4	qui V beaucoup
		(複合過去)	1	qui Aux V beaucoup
			2	que V beaucoup
			1	dont V beaucoup
beaucoup V 型 (21)			3	beaucoup V
	(複合過去)		15	Aux beaucoup V
			1	beaucoup Aux V
	関係代名詞 qui の 直後	(複合過去)	2	qui Aux beaucoup V

例 12) 動詞+**beaucoup** 型

Vrayement vous en soulciez beaucoup

really you-2SG it worry about much

You really worry about it

BUEIL J. D. (1461), *Le Jouvencel*, t.1

例 13) **beaucoup**+動詞型

il puet beaucoup nuyre

it-3SG can-3SG much to harm

It can be extremely harmful

BUEIL J. D. (1461), *Le Jouvencel*, t.1

おわりに

moult と très は形容詞・副詞修飾機能において競合し, moult と beaucoup は動詞修飾機能において競合していたが, これらの間には一定の使い分けが存在していた。

例えば形容詞を修飾する場合、*moult* は 2 種類の文型を取ることができた。Il est *moult granz* のように、修飾対象の要素 (*granz*) に隣接する形で *moult* が使用される例と、Moult est *granz* のように、修飾対象の要素 (*granz*) から離れた場所に *moult* が置かれる例があった。これに対して、前接辞的性格の強い *très* は、*moult* のように自由な語順を取ることはできず、修飾対象の要素に隣接した位置に現れやすいという特徴があった。一方、副詞修飾用法においては、*moult* も *très* も常に修飾対象の要素と隣接した位置で用いられていたため、統語的観点では両者の間に使い分けは見られなかった。ただし、修飾される語の音節数を考慮すると、*très* は单音節語の修飾に、*moult* は多音節語の修飾に使用されやすいという特徴は見られた。副詞修飾機能における両者の使い分けに最も大きな影響を与えていたのは、音節数であったと考えられる。

一方、動詞修飾機能を果たす *moult* と *beaucoup* は、「(*moult / beaucoup*) + 動詞」型もしくは「動詞 + (*moult / beaucoup*)」型のいずれかで登場していた。このうち「*moult* + 動詞」型の構文においては典型的な古仏語の語順が取られ、*moult* が修飾対象の要素から引き離されて文頭に配置される例が多く見られた。V2 言語に特徴的な「強意詞（この場合は *moult*）は文頭に置かれる」というルールが適用されていたものと考えられる。一方、「動詞 + *moult*」型構文は、フランス語が V2 言語から非 V2 言語へと変化してゆくに伴って誕生した新しい文型だと考えられる。そして、この新しい文型が *beaucoup* の語法にも応用されることになり、「動詞 + *beaucoup*」型構文の誕生へつながったと考えられる。ところで、動詞修飾機能を果たす *beaucoup* の用例を見ると、*beaucoup* が動詞の前に置かれる例と動詞の後ろに置かれる例は、ほぼ同数であった。このことから、今回調査した時代において *beaucoup* はまだ発達途上にあり、従来の *moult* の語法をそのまま模倣した「*beaucoup* + 動詞」型構文で使用されることが多かったのだと考えられる。そして時代が下って *beaucoup* の使用が広く普及し、非 V2 型の語順が定着してゆくにつれ、「動詞 + *beaucoup*」型構文が一般化し、最終的に *moult* の動詞修飾機能は *beaucoup* へと受け継がれたのではなかろうか。

¹ 例 1) *moult de vin* (a lot of wine), *multes terres* (a lot of land)

² 例 2) *moult belle eglise* (very beautiful church), *moult durement* (very severely)

³ 以下のデータベースが用いられた。古仏語（9～14 世紀初め）の資料：Base de Français Médiéval (BFM)，中仏語（14～16 世紀初め）の資料：Dictionnaire du Moyen Français (DMF)，16 世紀以降のフランス語に関する資料：FRANTEEXT

⁴ MARCHELLO-NIZIA, C. (2006), *Grammaticalisation et changement linguistique*, De Boeck-Duculot, 141, Tableau 2. を参考に作成

⁵ 例 3) *beaucoup de gens* (many people), *il travaille beaucoup* (he works a lot)

⁶ 例 4) *très heureux* (very happy), *très tôt* (very early)

⁷ Aux...助動詞 verbe auxiliaire の略。複合過去形における avoir もしくは être のこと。例えば、Aux *moult / beaucoup* V とは「助動詞 (avoir / être) + *moult / beaucoup* + 動詞」の文型を表す。例) Ce procès a beaucoup duré (The trial has continued for a long time) は、Aux *beaucoup* V と略記。

参考文献

- BALDINGER, K. (1978, 1980), « Le remplacement de *moult* par *beaucoup* », in *Du mot au texte (III^e Coll. MF)*, Tübingen, G. Narr Verlag, 57-87.
- CARLIER, A. (2010), « De *multum* à *beaucoup* : entre adverbe et déterminant nominal », dans TOVENA, L.M. éd. *Déterminants en diachronie et synchronie*, Paris : Projet ELICO Publications, 31-54.
- GAATONE, D. (1981), « Observations sur l'opposition très-beaucoup », *Revue de Linguistique Romane* 45, 74-95.
- HULTENBERG, H. (1903), *Le renforcement du sens des adjectifs et des adverbes dans les langues romanes*, Upsal : Almqvist & Wiksell.
- IMBS, P. et al. (1971-1994), *Trésor de la langue française : dictionnaire de la langue du XIX^e et du XX^e siècle (1789-1960)*, Paris : Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- MARCHELLO-NIZIA, C. (1995), *L'évolution du français : ordre des mots, démonstratifs, accent tonique*, Paris : A. Colin.
- MARCHELLO-NIZIA, C. (1997), *La langue française aux XIV^e et XV^e siècles*, Paris : Éditions Nathan.
- MARCHELLO-NIZIA, C. (1999), *Le français en diachronie : douze siècles d'évolution*, Paris : Ophrys.
- MARCHELLO-NIZIA, C. (2000), « Le tragique destin de *moult* en français », in *Actes du XXII^e Colloque International de Linguistique et Philologie Romane de Bruxelles*, Tübingen : Max Niemeyer Verlag, 285-296.
- MARCHELLO-NIZIA, C. (2000), « Les grammaticalisations ont-elles une cause ? Le cas de *beaucoup*, *moult* et très en moyen français », *L'Information Grammaticale*, 3-9.
- MARCHELLO-NIZIA, C. (2006), *Grammaticalisation et changement linguistique*, De Boeck-Duculot.
- MARTIN, J. P. (2005), « En guise d'ouverture : quelques considérations diachroniques sur très et et », *L'adverbe : un pervers polymorphe*, Études réunies par GOES, J., Arras : Artois Presses Université, 9-21.
- MONSONÉGO, S. (1993), « Le développement des expressions indéfinies dans la prose narrative à la fin du moyen âge : l'apport du *Jouvencel* (1460-66) », ARBA 1 (Acta Romantica Basiliensis), 189-200.
- <http://txm.ish-lyon.cnrs.fr/bfm/> (最終閲覧日: 2020 年 4 月 20 日)
- <http://www.atilf.fr/dmf/> (最終閲覧日: 2020 年 4 月 20 日)
- <https://www.frantext.fr/> (最終閲覧日: 2020 年 4 月 20 日)